

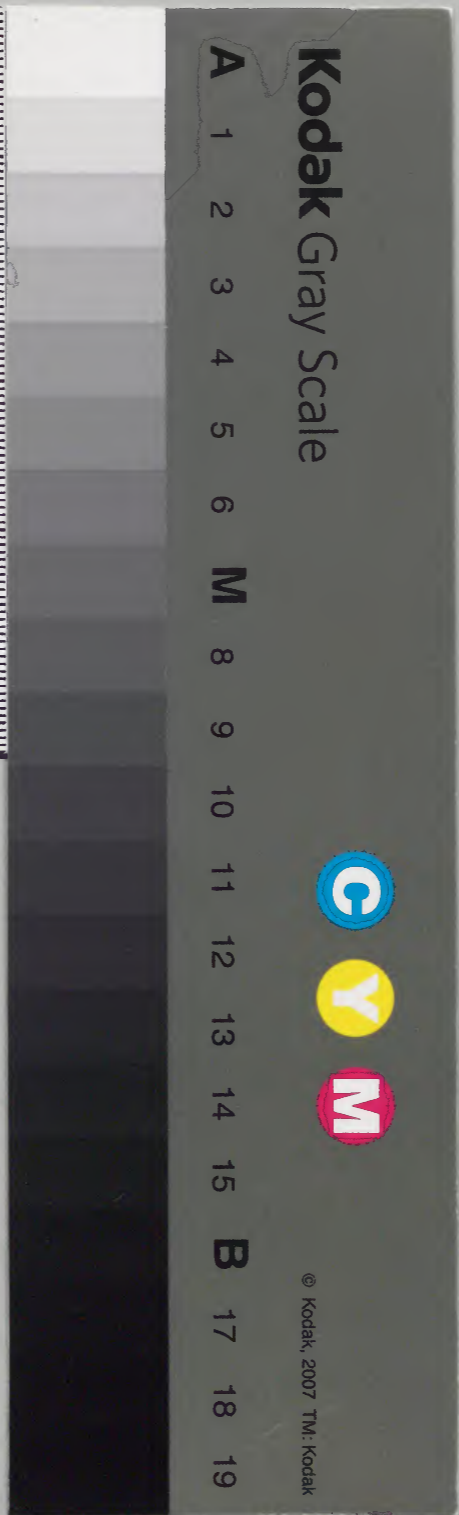
東蝦夷夜話

下

和書門類			
二八九二一	一	一	三
函號	架	冊	冊

庫文門内		和書
二八九三	三	四
函號	冊	架

内閣文庫	
番號	和 28921
冊數	3 (3)
函號	178 115





東蝦夷夜話卷之下

江戸



明治十二年購求

大内餘菴編述

穴熊と捕る吏 銅熊乃吏

附 東蝦夷アツテこの土人足才父の仇を獲て其屍を其屍に居ハシ乃

○熊を捕る者 秋乃末つこより穴熊アツテ其屍を其屍に居ハシ乃
向き穴熊を捕る者ニ丈或るニ丈たどふ穴を穿ちその内をいりやも其
麗しきものより布つと糸入口をちちりさき死たき一二人とあちちき
より寝ふりものあまふそ乃古穴搔のけつりり寝居中へ食とぬらまき

東蝦夷夜話 卷之下



元七
梅人
あま
穴
捕る
図



子
七里
中

熊を殺す乃たよる困まはあらしひゆりてあらしふ夫入る其場と遊
 延々熊一人の爲死んぬ其ひきりてあらしふ夫入る其場と遊
 健ゆりてあらしふ夫入る其場と遊
 乃穴城搜しりあらしふ夫入る其場と遊
 ありて婦女の業も麻帆狼狽の類たりて遊出し後其即其
 場よ皮を剥ぎ肉取解きて帰るふと遊出を奔走する其男子
 劣らぬをあらはしり又海より權權と搔き山林より新と二系ハ皆婦女
 乃持あらしふ夫入る其場と遊
 熊を殺すと死りてあらしふ夫入る其場と遊
 雖然と捕あらしふ夫入る其場と遊

あげなややく成長たぬむが家のやうに本城より刻よあらしふ夫
 入る其場と遊
 造り酒酒を醸しては飲んぬ其ひきりてあらしふ夫入る其場と遊
 キナ遊どりて困ひえがらしカムイ乃産死まうけ其たをイハシ
 タン子プおカ イムシニツ 柄のセツパ 髭 ハヨクベ 獲 タントニシ小イカ
 ユフ 籠ツウキ 盃 タカサラ 籠イハシニユイ 箸 五乃乃宝物二道管を
 トミカモイと習く悉く作らる水揚よりイナラを削りてあらしふ夫
 入る其場と遊

さくは不へいまへ引まらぬうちの大勢乃男女熊の居る牢乃四巻とホウ
くといひるうらな格子状らちく躍るをばはるる家よままうと木の目
みまひちちこ入るあるめく式法あましく礼をばは酒と
盗王様揚着と添く差出さ客ハ式と正あく飲むことうんこ乃
うの時むりやせ度乃とたひあるて後さ客一同熊乃前ふあり又躍る
めはあうく富ね一牢の蓋状をれまみだうと熊の首に縄をけ
ておるに付さるカムイの場取引かしくゆき首縄とさぐりけさて中
央る抗へ熊と繋ぎ置ま大勢あて躍り遠ること前乃ごうと熊を
口を以て腫えくまましく怒り呼吸せましく吼りねんあぐく美人縄の
端ゆり引出さ状合家子候乃弓矢りて四方八面より射出されそ乃矢

幾筋とましく熊乃身なつとを状ま細長き木の先へ逆を付るを
ましくたちる夫状をらひ落まうまのるその後さより透を担ひ射く
且つ熊をかましくねひをるまのり死状の目か乳りく膏あげるまの
の元巻ともは躍りあは休とましくも熊乃今限とままさらふおひき
つ燃然とましく跳きあはみ熊ふくろ矢状をらひ押く一ものるるき
る板より熊の勢あくとゆるころ九本あ一本持出くやぞ熊をかま
首と挿め美人大勢あがよる腰あうり抱ひかほまはましくおとて
押あさうらかくまこと殺度熊乃息のよく絶ぬま一掃に祝詞を奉
げ終ふ引あましく役けかき一カムイ乃座を居る俯よ依さく免酒酒状
直に登るを供まるとありされより元巻をカムイ乃前も圍居まてま

酒と酌むむるはカムイ飲とのことども終れハ其場ちく然と解き皮
 次剥ぎ臍と収く拵保つその肉を養ふはじくま酒とて毒とち
 流石も慈悲少ううらむもその実を喰ひく酒を飲むより洗つを
 おき一酒酒のあまぬぎりの豆粉とてころはらちあててころはこれ
 ちと美地の習風なり弓矢ハ必毒子の收りやもく然とともは地美
 地乃中業ちく化の蒸棧を用ぬいころ大能きとも毒矢とめて射
 と免くとりさむばは技次初きとたより毒をまきあめちく射る事
 あり乳とれむむどの小児あし就く抱くともうらちりよはち保ち射さる
 この目ハ種よもはぬが死何とせよは男はせしきもある判矯のアツエその
 上ニ陳羽織を着しうらむハ色々修持拍の小社と義首あハムタツ次

金け耳還もちきこる全報の教とわるううおめども博不情の人
 ぬ三祭ちく秋は酒を持齋し兄相よおきこるは然あとのそ原目撃
 ちなるまははちあるさきく美人の欽樂ハラムシヤと送送のといは酒と
 飲むもをわりの肴とりよめさく唱あさくを饗のから乾テツピと名付る
 のの秋ちくわ物とまもの之悔美志よはは悔夫の四徳と弾さるもの
 あり終ちくくも胡琴ちらんとなり西都ハちち大都あ唱物類ち
 交ちく見えあさるむたが本ちく遠引る江戸も流せしビヤボとて
 ののちはち秋後さるもので口ハ衙へく多秋ハちから唱るをこととモ
 ツコリとの又友人松浦子重が悔美よりもちまきこるは秋今不持
 ちり長き足絆ちうらむは都あたぬくあまのといおもさるはちの教ハ
み後あり

エウガリ。サユルベ。子イナエどりの身淨獨理るく夷地あくも個様の
 巧拙の傷むるこころもあはらば耳あつちぢくた聲と張あけ
 狗とく死く後さきま實の牛の釜中に唱く死あまのひた臣
 小いさか遠をさぞあまの

○寢小茶梅美アツケシの主人はシヤケロク。サンケトモの見守ありは質
 豪勇みく願使氣をさびるものどもうこまが父サカモイナクてあ
 日次をく畜かきぬる粟毛のあまの夷地を聖烟のこころもあはら
 次喰つゆののふ長あまのりある衣遠くもあはぬ乃は乃馬の鳴く
 琴の頻くくいうの無げふ閉えさるサカモイナクこの聲
 とまらぬ大いあやみさき如の夷人城さきひ馬の鳴きたる方とま

あまのこころもあはらば耳あつちぢくた聲と張あけ
 巧拙の傷むるこころもあはらば耳あつちぢくた聲と張あけ
 狗とく死く後さきま實の牛の釜中に唱く死あまのひた臣
 小いさか遠をさぞあまの
 ○寢小茶梅美アツケシの主人はシヤケロク。サンケトモの見守ありは質
 豪勇みく願使氣をさびるものどもうこまが父サカモイナクてあ
 日次をく畜かきぬる粟毛のあまの夷地を聖烟のこころもあはら
 次喰つゆののふ長あまのりある衣遠くもあはぬ乃は乃馬の鳴く
 琴の頻くくいうの無げふ閉えさるサカモイナクこの聲
 とまらぬ大いあやみさき如の夷人城さきひ馬の鳴きたる方とま

さうぞう今より山へゆきゆくやうき次兄むと兄弟うち目おに美人等附
 添く案内あるある山ふかけ入るわうこことるねん目おの義経ある
 うみ父サカモイナクも悪のためお捨傷ら血ふ塗きてお助へあられ
 城より兄弟気絶お尋さつつかさうおあつて口鼻は骨おどお
 かざし御ふお伴次郎へおまごお乃猪はきよもをさげ人聲の耳ふわ
 入らんごめきさうぐら虫乃毒おかりけ聲を出しそまよあるハシヤケロク
 うサンケもせおあやうや喧張るあり口惜おを救も目お眼おあけ
 かわたのそ汝達おが仇るか乃悪さいうあもあう撃とえ罪とまらう
 くれようし志おしんまお我が敵とるをわくと死悪を下にあうく恨え
 くれよそし我冥土の芭直よせん言わべきんそ目のそぞと其ま息ハ

絶を中より兄弟ハあつて悲嘆の涙流らちまらひ勅然とてたぢ
 らのり呼怒しんるいさうのふさあやうく高家の父山たあくもあ
 ける悪いそも巨大ののめとぞあつて假令いさる悪もあは父山の迷言を
 そむきごう直まお改と進るあう仇と討さぐかくべきやいさあよサンケと
 お眼よ血とぞ死さうくとまてけんとさう次加勢にあらう美人どもハ
 由うんとるあ兄弟次右を捨う押さえすけしよとよいぞれおせそ
 勇猛のきこえあるそあこの父たよ教うた然い定めくるあうらその強
 敵よ向ひさうは山勢あういおんひとまの去和はより次若若松和
 カムイの汲取(作)やあう其上より鉄砲の用意もさうてお仇る能よ出
 せふとも父山の迷言ハ果もあうぐおま付よりうもさバそを強もるたさ

熊野

熊野

熊野



熊野

熊野

熊野



くらん者も角も亦下帰る母出も具は語りきりを出るりてこそ
 よめんめと危後一歩をありはる事始終と海潮利を情りく松原敷
 の波折へ折出より松原敷結合乃人よこの情をほらふききけくま
 人救と増しあへ海潮利を情もたふ再入押さふ兄弟とそとあ
 の人救いもこに得抱を引抱つあ人の心よか入まてりてさか
 性くにか乃驚いさまぐ遠くもまきらぐぬい及あふと驚きあふ
 中に三抱りやあんとこの樹と小楢のあまを割んとまきあふ
 にはさうらむとみく運ま死な死にみえおひ強さふたを夷人力
 希はた右より受付んとまきあふをたそとあらうらちシヤケロ
 透る紙ねらひラシコ弓子毒矢紙は之ヨリ引くヨリとまきつ初
 矢あや

またぞ月の満つてつらせめくたちをさうりてまよふつと流石の荒熊も
 痛もる目かひはんぐえの甚果紙をばさひ弟のサシケトモを乙矢さけ
 く矢筋たぐも素より毒矢のこころ目ばそがうち身肉へまぐりらんた
 へど七顛八倒悩むる死兄弟を括あつ矢紙のらとと折廢く丸本紙
 ろく首尾とまきらそ力に任まてうじふ熊ハそのま死まてり見弟者
 飲の眉とむら死今ぞ報むる父の仇二人の力に及びが死熊も元
 とるまて難まく付そを且父乃迷言もむじうらひ志紙透るま
 中へ松前カミイの血後ありとてか地上げみぞええりける
 夷地ハる歎紙とまて粘抱し出へ食料は充るをりく皮と剥き後
 去折へ出まらるへまきまとも父乃死るる紙力く熊の全身紙す
 ちりきり

此多おきぬ ○ 徐庵按さるふ阿部茶任の然の月乃橋のこ諸茶茶に説
 く工匠清の季心術乃金川瑣記曰く然人然馬然物然猪然の口種
 あり予がえるあれた物然 蓋人字の漢を 生且とく終日五月言さ二尺
 毎人乃とく立ちも是も人の下 遍体黒毛た心胸の骨に白毛ありと
 偃月のこくく まもつた 馬然といふものおらへ選りて
 人と割き諸款と害さるもの

○ 美人酒六ある日抑の且ふ酒りていふ元アイノ乃為食の美款もども最
 そこの酒のあわい雲霧りく山海の嶺とていふと死を殆食物よき
 交ゆるとさくさくさうありさうありアツケシみの嬌をあらく永世そこと
 ありふへ食料よきからん飢渴の来りともお安く今日と抑り

既酒六が祖父まぐハクスリのお人りしが飢煙子遭くこのアツケシへ
 あり恒と俄死を免くさうとわたりき借この嬌を實不廣大しと
 アツケシ入江のたぐ中に獲とくく獲とるあるごとくお安け玉の洞一
 宇坂安壘と 山田文太書 おの且等様中の腎状きんとまると死んて
 かまらひ酒をを携へモチア小助 の みる多入海を寄本を携ひ集めて火を
 燃一かの嬌を振りく あま 食ふ其味最良なりこの工ふ付くおは先
 のく表露録吳坂園とて死の嬌の糸と名ひ出さるるる因ふに裁き
 蠟即牡蠣也其初生海島邊如拳石四面漸長有高一二丈者蠟
 巖如山每一房內蠟肉下片隨其所生前後大小不等每潮來諸
 蠟皆開房見人即合之海夷盧亭往々以斧楔取殼燒以烈火蠟

即啟房挑取其肉貯以小竹筐赴墟市以易酒肉大者醃為炙小者炒食肉中有滋味食之即能壅腸胃とあると見且南方乃園子も燻の生くく山吹さきるものありのと又見くともアツケシは燻も其形状他は異なりく殼の幅二寸許長さ一尺二寸ふまに肉を僅よ三寸に是らびぬるく遠方へ贈らんともるに殼と去り指は免後灰とくるとききき其味稍劣なり

サル領モニツ
左苗領紋別の孝子シア又乃度

○サル領モニツといふは兄弟此去人ありたり兄弟チタライオとシア又といふ父をさた乃と病は累く母イルチヤロのそ存あり且とも平生持病は難きと見く一日とてまづじき日ありむとぞと見チタライ

其母は腰弱く不具乃身よりと見くさしたる業もほしゆと云不白の用とくハ馬の荷鞍状細工あり一樹の皮をひとをけは灰粉なるの母まぐ養ふ力がく見ハ申のミア又も二日灰をまきとみありどもをすの教色ふのゆきと性質者か乃あり且は漁業の際みハ山吹粉き乾ありとさらり母乃子業のアツシの糸も母の目と山吹くヲヒヨウの皮灰削ぎききとく二日灰をせかき寸儀あり母の目と山吹に居てハ法きつらふまの虫灰をくまると漁業の人見ふと死を体の目灰個ハ赤くハアまぐ母の安否灰行ハ慰めまぐ山吹乾魚その他食料はあるをきもの灰丹散して母の許ハあるまぐの意をあるハはとくまぐシア又も例年出稼とく彼岸に返より十月の末つとまぐの間西地



孝子

孝子ニテ又山中に
 於て雲々に結不
 顔らと備せあり
 たる圖



三波のめどもさそめ人等多く運集くありはみ然りし何
 くれと目みくまきりめ一人もはと度所領のちり原さしあはたなごふ
 乃折らぬのこら死孝公のめ賞しあふあ一のは不墨あやとてサレ
 信のり自る大西氏頼の業りく得よか法りくその不乃知録不場出り
 函府へ中とらとれれば其書特状裁ト多し苞入の米若干納つてとらん
 ○撫夷地東西乃人別数きに九一萬八千人といふ其内男子九千
 四百人女子八千六百人とるに死る八百人の録夫あはく志かろう人
 諸場和ふ入込を裁年さるめ美女奴妾とせりつてく殊より美女も肉
 地の人より別流るるを衣食合ふ之から火地のはる死地死別志か
 ばさる人乃むくばさ死地とあふんと好うぬかひるてゆけむ人あ

あり死地ぬみぬりに堪へてシヤモ 内地の人 小向くチヤランケ
 とひりけ不教と法を違つてを名茶酒本締を乃地の結地ぬく飛
 と僕らさるてとあふりさしは改革につきてもたの悪弊とてとく
 割せりと去人ふまると中録婦乃ああらぬかうに年終お夜の男女と
 りく死傷させらるるに死場所法乃る目に命令あをり六の時サル
 小あの大西氏頼の工夫とて先死傷乃と死を妻秋あ度と定め置る
 改夷人へ中付おき年頃ささる死ぬく肉償とてのつかかりえ
 ちうて死あまのあもに官衙へ呼びて改夷人さし海ひ夫婦乃
 道就子兄弟乃多るまると産業と急弊あはくさるてとまご録
 かきく死傷乃牌符とあはらる

東叢書 卷之十 第廿七

牌符圖

刻 安政丁巳年
二月八日縁組

信令

三ノコノ村 並し名 コノカイ トウキ 巳二十三日	ヒラカ村 並し名 コノカイ トウキ 巳十六日
--------------------------------------	------------------------------------

斯くいふは死場所より夫婦の誓ひ成るるを以て之を白紙のシヤモ
昔に押寄らんときとのあらば速よきこととてあやむくことせり
こころ死完美の執びぬるをあらび成後と流してぞ速きこととて
此のころの妻婿夫婦死すばコノコロてその死後くつるに九十年後
も死す所を妻と誓はるともあらひけり其内第一族の技師とてけり

若く福はきき居きたるをあき嫌の由を尋る男姑のあらう或る
幼稚のものをあつた目とひらけ口より粘りかのコシコロ成りたるら
漢事成るまおより誓ひのふらむ止むと成るるに極せん出づ
いとも何れなるを粘りかの目アツケシゆくホニコマツとて少女と膝
治せしその病懐血症より出く市面へ飛養温乃てく改願後と出づ
花舞とてく誓ひを茶餅の中退屈せりしや四月五日の月沙汰の
ききいぬが志あるとてあひ居るちやと少女の母は出合とて中川が女
病氣のやどるありあやと問ふがその母は誓ひのやとてたが秋秋とて止
却の目も誓ひの毒みうの他乃後と後と後と後とそれゆくやとて
たるもをひらけを死せんとて死せんとて死せんとて死せんとて死せんとて

東叢書 卷之十 第廿七

亡き人を再かひひきさるるごとくいへて地をさしひたりあを
ゆる墓まわりのまきぬこころいとどおの目按むるふ夷人の情態死
ちりくみみむごといふそを必程薄るにわらひ然長痛疾のよる
おゆる渾然たる朴直の質死美称さるふ是るうり葬のこころ
出せむこころ贅さへ

松前乃肇基 兼 東蝦夷よりオキクルミ乃濫觴

附 庄味方コタン乃事

○ 蝦夷地乃權輿最奮く往古 景行天皇乃征東より
赤明天皇阿都乃比羅夫地をいへ 野田淳代津程管の酋師と率
りて 蝦夷を伐ち其地を詢(遂)治を後方羊蹄 今シリベツといふ内地の富
みゆきとていへ

ふふかきく帰るといひよるよる後彦三軍帥と向けらるるを
其の法守府將軍坂上田村麻呂 蝦夷乃地を討入り荒微と驅
りて 悉く東北地を収め海小國を塞ぎて 曠濶乃 蝦夷地を
極きより 蝦夷人乃王化を 函津を治め 全く 田村將軍乃勳功を
偉らむとまをいへり 遠六百五拾米を行く 足利將軍義政公の世
嘉吉三年癸亥十二月十二日 下國安東を盛季とらぬ 南部大膳
夫義正と合戦し及びいへ 戦ひ利ありて 遂に 負津種乃小泊より
渡り 松前 松前 松前 松前 松前 松前 松前 松前 松前 松前
きと進退あるに 究むるに 永若坊道明といふ法師乃たは 松前より
るが 彼法師 肝膽を碎きて 火種をちり 行りて 心を 不思後や 巽乃

東海道名所



東海道名所

武田吉兵衛 松前
 初めく 松前 渡海
 くる 國



風忽然と吹地り盛季が舟りつる松矢を花をさぐりて遠の沖へ
 出たり南都方の軍兵を吹と掃と揚と岸をまぐ追あり元来ハ
 安東を盛季が舟りつる舟を救指所健とありり且つ力及をひて引返
 ぬ盛季を虎口城のつと籠るく急へ渡り着き矢不來とのふを著
 たるさしむみ合せまぐも十二月十二日の強風とを相つひりてこのと死
 よりぞひ初るさく年あり且つ支安と改元あり安東を盛季へを病み
 罹りてこ乃年秋遠行の人とつとたり同志き三年盛季の長子あ
 東康季を父と若らぬ武勇逞志死めり且ついひのちもあく内地へか
 王父の志次継ぎく陸奥守國と切麿と志かして本國より羽州城切
 てるるを多年の宿望己も是るまんといふ勢七百餘人三百餘艘乃兵

船と浮べ海と渡りまの津控へ攻入りてがまて戦ひ利ありと
 終り陳中へ死にたり且つ康季が若ら子郎黨を其和より己隨云
 落りきりて且つより五年改行く寶徳三年辛未八月廿八日若狭の
 國皇清和源氏武田文暲と支國信の婿男とる吉部信廣叔とて本國
 次立出陸奥へ下向は小南都乃田名若より船と浮りて渡海の内ヲコジリ
 とのふ不へとどろく渡海を附從ぐよあり依之本三希を津築綱工友九希
 右邊門尉祐長若うり生時ふ當りて相原周防を政亂河野加賀を政通又
 安東康季乃舎才政季の目子澄を飛をらん同トく渡海をといども
 武田信廣の武勇小澄を自りて大く信廣の麾下に屬とるめ一人は
 信廣を渡海乃天の川に居候はしたまふもまるとこの國勝ふ小城雲と築

乃復天の川に沖に當りて光の光明を放つありて人漢史等見
 成るる縁き怖れは件乃由成所へ出たりありて帝坊院等延阿闍梨と云
 智識乃ありて名はこれ成すこと思ふこと乃ありては我はく見ん
 といて阿闍梨を小筋に九条に沖にありて二道成何ひ看ふか乃光と相
 成るる阿闍梨乃方へ去りてありて筋ををきく光明赫物と成る
 といて阿闍梨の漢史等に據るは細りて引攀げんは海系に纏る
 といて見沙門天乃有像一軀在まきり阿闍梨名はとをきとをきと
 信の信度と披露るまに信度と奇異の思ひ成はして同ひは是は阿闍梨
 名は是と異とと象むりて是乃ありて是は六拍ひありて自ら成るる

其のまよひて細きまよひてふつは彼の有像出現ありて説とつふふ
 信の信度と披露るまに信度と奇異の思ひ成はして同ひは是は阿闍梨
 名は是と異とと象むりて是乃ありて是は六拍ひありて自ら成るる
 阿闍梨乃と成る天の冥助みやわひてん在城のわたりてく冥佛の出現す
 といて今より後二子孫にありて武運長之を後より結縁する
 といて秋花讚嘆する一帝皇一字成建三一の有像と安曇一なり阿闍梨
 阿闍梨成りて昆沙門堂の別當を成む今和泉沢大泉寺の昆沙門五
 六乃有像ありといひ信ふことより信度の武裁益盛なりて一族繁昌
 業とて入るる内地より海を渡りて来るる國を侵りて擾るる
 命令小教くありて信度臨夷乃酋長等城中に居せ酒飯を

出しく款待けり小佐廣も其産ふなるまゝ重次把る程々の者あり
らち竹乃脇切の吸物中に黒き小石歟者て猪口にはけり出らるる
管ハ箸歟とてくさや喰べんとさる小賢くさる齒さざりたる小石と丸
く口に入るところ勿論喰ふと乃かふをねだ定ち折敷ふさう一重さ
せきぬらうさま粒ひ感うう居るうち佐廣故て箸歟さりあげ竹の吸
物とさも者くげお強うづつ重次めらしまる猪口不盛うう小石も
うら且つ首長等ハ二重歟とてくさる中にて尋さおそはかく堅確ある
もの歟食さる大將うとてくさるをさるは重次傑さるんと名とさききてぞ
おそはる其時竹乃脇切の吸物も佐廣宿筍の吸物とてくさ小石とを
たるハ黒き者豆うう皆是美人歟長拔きうん一時乃計策ううは

よつと東者砂系管の本まぐ乃美人西ハ然石瀬田月まで松前へ
さるこことさきもきらひ因ハ康正二年丙子乃妻のこころじがシノリの旅治
村ハ熊美の首長一人来り細やあまらん旅治が磨く手し刀歟を首
長次一刀ハ刺殺しぬ去乃送振よりく城美人ども業と結びあかこ
城起る九五十日がわと國戦止まむとて為入人氏多く死をぬき
長祿元年丁丑城美人さる城起しシノリ乃館主小林左郎を遣は良
景次攻る工急ううは河登加賀も政通中登二郎教通佐友二郎右
邊門季則服奉の南條旅治少輔季遠根則旅の館主蔭去甲斐も季遠
軍於の彼至今半刑於少輔季友松前の中後下園山城も定季相系国防
と政胤称於田の彼至今近後田并右邊門季也原口の屋於六希左邊門季

東者砂系管
卷之十
長祿元年



武田信玄

景行



大目 武田信玄
 えぞ 坂美乃乙名と
 款待を圖

武田信玄

景行

小石の原若右衛門將監等の一門數百の軍兵、延徳一、小林良、後援け
 とす。故美人の権勢、是る榮慶、故處、まふ聖安、年以及び、く及逆乃
 魁首、るるコシヤマケニ父子、其地乃眷属、皆救指人、故捕へく、其首を
 小石、く故美人、地十の一、を平均一日、を逆ひ月、をまひ、く美人、ども
 帰降、まひ、ども、慶、潤、故美人、地、後、乃武、我、盛、う、く、ども、まひ、く、還
 派の地、まひ、く、及び、び、び、く、殊、ま、是、初、ハサル、ユウ、グツ、乃、美人、張、勇、ふ、く、あ
 中、由、ま、ひ、く、松、前、へ、故、る、未、らん、勢、累、ま、ひ、く、え、け、ま、ひ、く、佐、廣、大、軍、城、後、く、東、西
 の、故、美人、切、磨、り、奥、地、ま、ひ、く、も、入、ら、ん、と、思、ひ、ま、ひ、く、く、が、佐、廣、定、業、乃、り
 法、ま、ひ、く、病、の、為、ま、ひ、く、遠、逝、ま、ひ、く、享、年、六、十、四、回、小、明、應、三、年、甲、寅、止、月、廿、日、あり
 法、號、と、荷、遊、院、殿、清、嚴、深、真、大、禅、定、門、と、僭、る、内、外、上、下、悲、哀、不、噴、ひ

つ松前創業のまひ、く、厚、く、其、武、を、死、か、る、ま、ひ、く、乃、法、ま、ひ、く、の、ど、く
 い、ま、ひ、く、既、に、懐、と、死、ま、ひ、く、た、る、く、死、氏、族、門、系、城、中、に、寄、り、集、り、孫、後、一、宅
 あり、ら、ま、ひ、く、生、存、ま、ひ、く、ま、ひ、く、の、者、血、城、軟、ま、ひ、く、ま、ひ、く、誓、ひ、城、ま、ひ、く、佐、廣、の、長、子
 宮、内、少、輔、光、廣、と、ま、ひ、く、其、衆、を、終、り、む、故、名、城、改、め、く、若、狭、と、し、り、
 同、じ、ま、ひ、く、五、年、下、因、山、城、を、恒、季、院、季、の、城、殺、ま、ひ、く、相、承、亮、三、弟、季、胤、城
 周、防、ま、ひ、く、改、ま、ひ、く、ま、ひ、く、松、前、の、者、後、小、代、ら、ま、ひ、く、ま、ひ、く、ま、ひ、く、村、上、政、義、が、ま、ひ、く、ひ、ろ、り
 と、の、ま、ひ、く、ま、ひ、く、ま、ひ、く、光、廣、勇、悍、不、羈、父、上、劣、ら、ひ、終、く、四、境、と、守、り、政、刑、を、修
 む、る、一、族、即、侍、心、故、傾、ま、ひ、く、ま、ひ、く、ま、ひ、く、ま、ひ、く、永、正、八、年、辛、未、の、四、月、十、六、日
 ウ、ス、の、穢、茶、小、二、ノ、リ、石、倉、三、ノ、取、乃、彼、故、美人、の、為、上、政、義、ま、ひ、く、ま、ひ、く、ま、ひ、く、ま、ひ、く、
 あ、り、たり、この、と、死、シ、リ、に、河、野、派、次、右、衛、門、季、通、政、通、の、小、林、派、右、衛、門、良、定

同氏小次布季景 遂に利きして自害を同十一年三月光廣乃嫡男良廣百八十餘艘乃
兵船を浮べ玉乃川の彼と皆ちく 松前の勝山城に引移る上の國乃景
備時二帝を廣二日所衛る翌年乙亥城夷人其里く上の國を侵と
よ一汪進を至るは六月廿二日若狭守光廣自馬城出して城夷の魁
首カノイチとりの見才を討く其城と小彼の多之埋む今城夷塚と
りよる二百とより 其後享祿元年戊子城夷乃酋長タナケニとりの其
黨七百五十人城引率ちく頼田内(押寄せ彼皇二孫九希友弟希系と
攻む彼乃中ち折布く防禦の士卒甚少く舎身祐致上の國(不用
あましく性きたる苗ちこれこととるは祐系一人勇城奮く防ぎ城小志自死

多勢乃夷人攻たくら自終に討死とぞとるなるタナケニを瀬田内の
彼とを丸く勢破作のぞく孫よけつこの國ちく押寄る是時二帝祐致
ハ折の且ち苗ち小見祐系を討と頼田内の彼を襲ひさらは
け且ハ玉を首髓に徹しいかもちく渠城ちちり見祐系が悲魂とら
さんものく拘中に一計と殺ちとらと取小の醉よを乃且タナケニを景
み多く追ひ来る祐致ハちと息をうら上の國に疎疎とくひもるく
あきとるくらこの二天重く城中へ入く合とく二とら且ハ彼を二帝
廣橋の上より祖とさだめ夫とらとまかり門くみ遠くと放くハあやましく
魁首タナケニが既ちをとりしとら射こみとらあに放く雲霞の下
貴とせざる夷人どもハ之將乃らえとらとらよりまどかハもく城入る

新編 徳川実録 卷之二十一 諸將

右往左往と散れんと城の中より許多の士卒繰波とあけ貝鼓と
 切て出ると討れりしに追ひつゝ我陣小畢をせけし二并祐波希往
 等兵に珠兵二百人城引具と頼田内乃飯(保)里又且六城夷人
 本戸城固めり入食たては祐波又怒を之をあげてひひたつこ
 兇夷等が振舞ふ汝等あらびや城將タナケの上の園乃珠非
 今を既と討てふ多城催とすのをも祐波と城をからん虎の
 假を瓶と汝等とてさう速に海軍を命を助は好きせんぞと二
 城人をひとまゝあはれし討て毒矢とてさうもさび二二二攻
 且を流石と極き兇夷等も冠首タナケの討てたりとすは且を
 戦の力とあけ珠と推くは目くと城兵を急い追討ち首級を
 取

擒王暫時がうちに兇賊をきく瀬田内は結末をたり其後又天文五年
 六月廿二日西城夷乃酋長タリナとてそのと大將とて熊石の
 一揆と記さる其勢凡五百人近目松をわきあきんとさるる
 者若げうり乃且上の園に二并祐波と先鋒とて橋邊二并
 廣二百人と引率とて西城夷(後)向ひ速に一揆と珠鼓と
 平均とぬこのタリナと東部乃タナケが婿とて男は廣が
 討てにたれハ吊殺と殺さしとさう天文十五年丙午四代橋邊
 兼廣立つ氏部を捕良廣乃婿男とて母ハ根内助の彼を將古甲
 季通の孫女とて季廣相續とて武名と遠近と夷一海
 大小名孫の珠と膝と腰と東西乃城夷地三十里外と結
 取

初めく夷地交易程來の法度と定むるは天文廿年辛寅あり今
あ政四年丁巳城去ると茲小二百十四年あり文祿四年丁未四月廿日
吉漸を以て入るをく永安と號を享年八十九後法幢寺殿心田
永安土居士と信る五代塘濱民郭少補慶慶乙酉四年丙子豊后太
閩乃命小仍く志摩書と改むるは若狭書季廣の三男ありく母河野
加賀書政通乃女あり同十八年庚寅九月十八日慶廣内地渡海同十二月
十六日と系し初めく豊后太閤は福一豐年二月十八日帰臺を永祿元
年壬辰又内地渡海同廿年乙巳豊后氏の朝鮮乃級小後ひ正月二日肥
前國名後屋の陣中み於て後五位下に叙しは籍より傳馬乃判
状賜る元和二年丙辰十月十二日病を以て逝を享年六十三慶廣院

○四味方振夷といふ其起原を本振夷サレユウブツ乃コト大旨より
ラミカタコタンコタン名所といひと稱し松前服従の故を救度乃合戦味方小
系り忠節城場を既寛文間本都シブチヤリの播乱とあり其の故
寛政乃初クナジリ傳の夷人乃由國人と許る殺害は此の一事に化於押
旁き地夷地ニ城年みせ由國人城織るをんとせしかば由國人はほて次
傳へき勢を以てシヤモ地城きて逃るの事とクナジリ夷人乃れがごと
と後より追ひらるサルより四里東乃方ニカツプまぐり来るなりと云
ナルングル者因於フクモミといふ所お待らけ居くクナジリ夷人城喰ひ勇
其所へ松前の討に近着きサルングル城先より追ひつ捕らつて殺ひ

○四味方振夷といふ其起原を本振夷サレユウブツ乃コト大旨より
ラミカタコタンコタン名所といひと稱し松前服従の故を救度乃合戦味方小
系り忠節城場を既寛文間本都シブチヤリの播乱とあり其の故
寛政乃初クナジリ傳の夷人乃由國人と許る殺害は此の一事に化於押
旁き地夷地ニ城年みせ由國人城織るをんとせしかば由國人はほて次
傳へき勢を以てシヤモ地城きて逃るの事とクナジリ夷人乃れがごと
と後より追ひらるサルより四里東乃方ニカツプまぐり来るなりと云
ナルングル者因於フクモミといふ所お待らけ居くクナジリ夷人城喰ひ勇
其所へ松前の討に近着きサルングル城先より追ひつ捕らつて殺ひ

東夷傳 卷之十 下 終

遂にクナシリ夷人城返ひてまをけ乍事の結まりたるに全くその頃ナル
 シグル乃勢盛なりと云ふクナシリ夷人の指するところを統率して控きこの不
 より引返さしむるもラミカタコタニ乃勲功ありたりとぞ安政三年丙辰
 の夏サル語の卜目より大西氏根其取れ乙名とぞ一先返夷人城返出
 去り支配人亦不性返互相お成りつてこの頃までの勢風とあらざり山國の
 風俗も化しやなぐらん流ありたるふサルシグルクル者どもと
 判官義隆の遣風と進慕し確乎とて此の治習も深まざる名稱も怒
 訴も及ぶと見大西氏根元夷も勿つてつるや今度エントカムイより振
 夷地の者どもも山國乃官民とひくく厚きは接育とあらざるにこそ
 強くもゆるぎをみわくと遠宵よりはるやまの汝等が産物とほしむる事

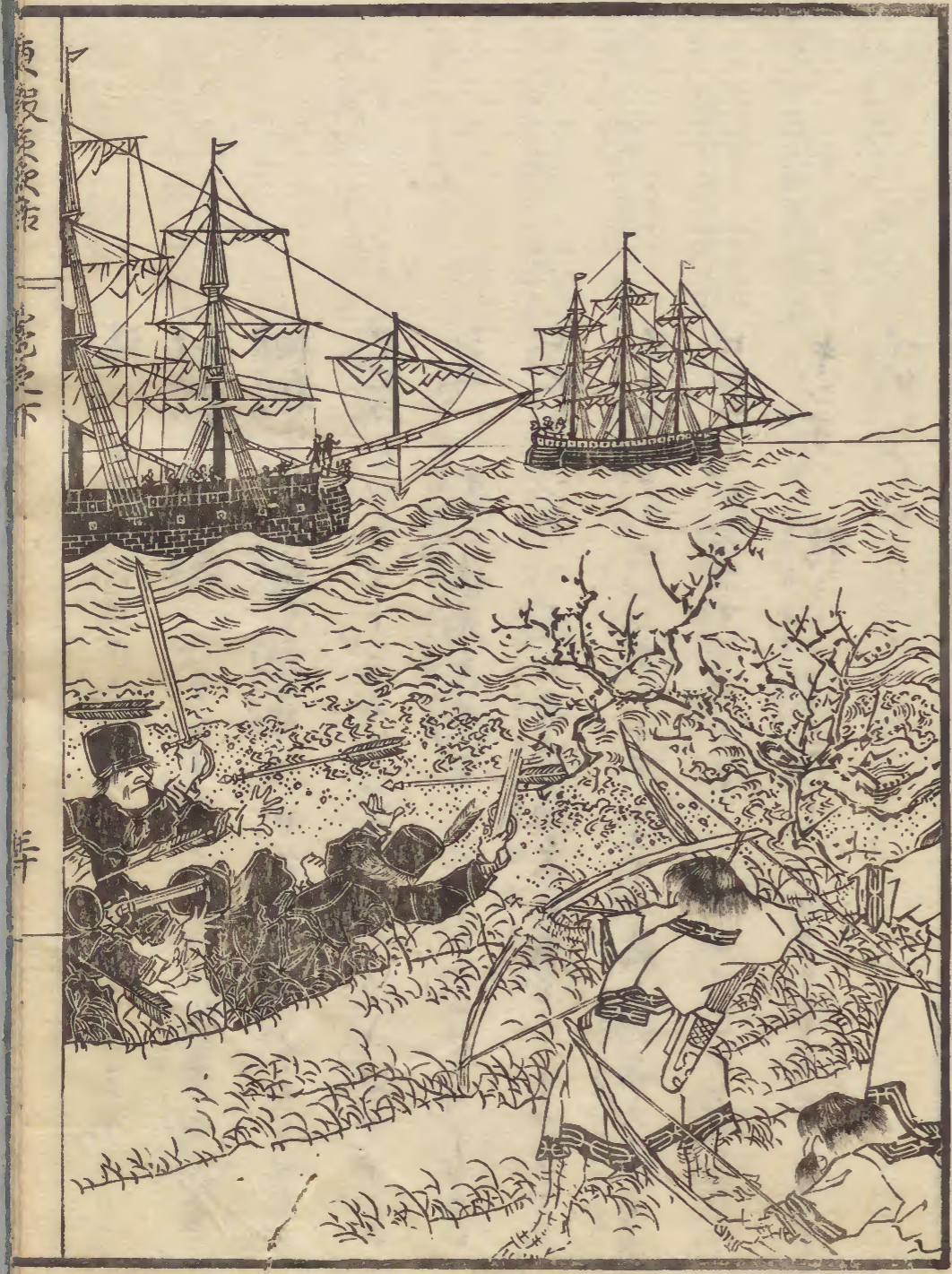
ある判友どりの素二道源氏乃播流ありとわくことも尚今エントカムイ
 と申しきまハ則深源祖家の流裔よりとらを多む判友どりのふ高きま味
 も爾ド理よあそあふれを多進と申しきまを儲す汝等第一
 振夷乃地も放り吳家のことある或ハ吳邦乃船の勢ひもまじく境と
 侵もこれありと死をいひゆるむるやんそと昔の覚悟をきりまり一と
 いまも此れハ熱小きセニケレ去産丸イコラシグルの友人もみまゆりやる
 ちさんゆまへくサルコタニ乃者ども往古よりや合を松前カムイ味方
 系りしより粉骨碎身志くお働外遣風を今心ゆくおとろくやさびこす
 公乃御盡美記にお成りよるものサルシグルまじあを何事まは作付
 らは決才一臂の力に法にじ城夷の地におく授礼のことありたり一吳

國乃松の上陸は比國を耻かゝむる事とぞぐらふに於て其時身命と
 抛ちヲミカタコタニの名ハ使々々強しやきるを今其部より契約乃
 船美人ハ通子僅なき即時ハ四五千の勢ハ集りやまへく忠節の事ハ
 是きくハ物ハ松前カハイに取テヤまび其ハ終る事ハ身命ハ改テ
 赤ぬり狗を叩きくぞ迷たすハ頑愚乃美人ヨシケラも斯く義勇の言ハ
 其主張ハ赤公の程をあらハケルも全く涉徳風乃そく不且有同途
 の寛宥ハ赤公ハゆるみらん去乃依と褒賞スハ多ハサルハテラカ村
 乃其乙名ハフラテハメノ米若干苞賜りも其ハ後ハ

ビラカ村
 惣乙名
 ハフラ

一

其方依親々々々 イヤニアナキ子。テイタ。イカシ
 シロワ。 申傳ハ依相守。 アイノイキリ。ヒシノ。
 イタキシユカト。ヤエコ。シツカシマ。 赤身方
 コタシヨ唱ハカ。 シミカタコタシ。アリエ。エルエ子。
 イヤナキ子。 勲度忠功も有之ハ故々々々
 シユイク。トノエレシカ。アンカイト。アヌワクシユ。
 兼々厚く相公得。 ラシマ。バアセノ。ヤエラマツテ
 ワ。 齒場不土人共一同(能々後後加) タバン。
 コタン。アイノウウタレ。ラビツタ。シ子イキン子。エピ
 リカ。ケウトモ。アウバカシヌ。 年来縁縁々々



西の船

東の船

年



おみく
 の
 味方コタン乃
 者ども 赤人と
 我々らち勝ち
 たる
 図

東の船

西の船

年

くよりう食物を運び来たてぬる夕日に抱えり上臈の如き
中ま 出づり目録をえとて息乃備もつたれ其下先陰をかくるに
上臈の如き固縁ふり洗しり身ごりやう十月を経産はしく男を
たり其後見をアイノと呼ばる所より移りて今乃世まぐも撫美人をアイノ
とのふるこまゝ 親系をさくどおる素より移りて洗しりて移りたるに
ちと撫美地の人は因より播種ありといふもおもむき深き志あるものり
産ち乃音高幸氏の少女とり畜かきたる梁執といふたゝ素あそまに
三年のぬ六男六女とて其子言語体儀好んごん産入て平腹を
まひる幸氏其志よあぬひ揚ふよ名ん度沢といふも其商は滋養
を辨ちく養美といふとありおのほと按ざるに婦人は昔の活をりく撫美

地のラキクルに附會するものあり我を関元濟がら又別本於の言
をいふ都方より記述さる貴人の位をさむ宮古といふ言ふるるる
上臈もこらとてまより本部のシブチヤリ(深流志るものらん備まると臈のま
業ちくオヒヤウと唱る 本のはと播くふは横を衣は織りてさうて
今アツシといふ又このまぬもく網と造り臭と捕まて食物とほたりと
いふその星をゆるふとて人氏も強え来アツシを國建之の頃源判
官義輝孫倉右幕府の為小月地より城宮より移りて撫美が清く渡り今
サル頃乃ハイノサウシといふ一止まりり矢をりく多敷坂捕ま地と報き
粟稗と播き食物とほりて数年はまらに恒たるとあり六判官の古蹟あり
かこに訪むる神工神祖ハサルの云石許は勅語をさむバオキクルとて称する

上臈の如き固縁ふり洗しり身ごりやう十月を経産はしく男を
たり其後見をアイノと呼ばる所より移りて今乃世まぐも撫美人をアイノ
とのふるこまゝ 親系をさくどおる素より移りて洗しりて移りたるに
ちと撫美地の人は因より播種ありといふもおもむき深き志あるものり
産ち乃音高幸氏の少女とり畜かきたる梁執といふたゝ素あそまに
三年のぬ六男六女とて其子言語体儀好んごん産入て平腹を
まひる幸氏其志よあぬひ揚ふよ名ん度沢といふも其商は滋養
を辨ちく養美といふとありおのほと按ざるに婦人は昔の活をりく撫美





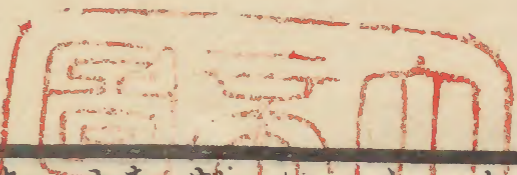
山

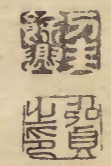

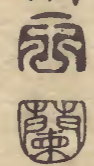


上方乃上筋五
 部のシフチヤリ
 海峯(海峯)にて
 大の者(大の者)なる
 婦(婦)圖

山

彼の毒のようく判友の拒絶はまことに美人の義理を判友のものとすクリ色の美人
 を義理とラキリマイとの死ゆくこれへ唱へて彼急あり拒絶す今も用
 毒をその判友の送製して附子とまじりて擬箱との毒虫炊爨を製する
 のあり附子の方言ニシルクとよまへる乃毒のシニルクといふは凶や毒とまじり
 りてまじりて附子ありさく判友の事實今も確たるは美地と文字のあら
 ざりてあり判友と西の拒絶は歴々を鞆地へ渡りて其後を明るる寛永
 中越若乃國神保乃松頭達州へ源流をるる小糸辻都の回うくかの松原も小糸
 法とこれまじりて建美奴兒部のまじりてなす遠くの門は義理と辨美の像
 とまじりて掲げありと判友の鞆地へ渡りてと顯然なる後ありとあり
 東蝦夷地話巻之下 年



著述 大内餘菴 
 圖畫 田崎艸雲 
 全 橋本玉蘭 

文久元年辛酉晚夏新鑄

大内餘菴著述并藏版

江戸書物問屋 文苑閣 日本橋通十軒店 播磨屋勝五郎

